

第24回日本外来小児科学会年次集会

2014年8月30日

発熱患者に対するグリセリン 浣腸処方の試み

くさかり小児科

草刈章(医) 渡辺愛子(看) 傅田留美子(看)

廣重典子(看) 嵯峨 睦(事) 昆紗代(事)

上地景子(事) 草刈みすゞ(事)0808

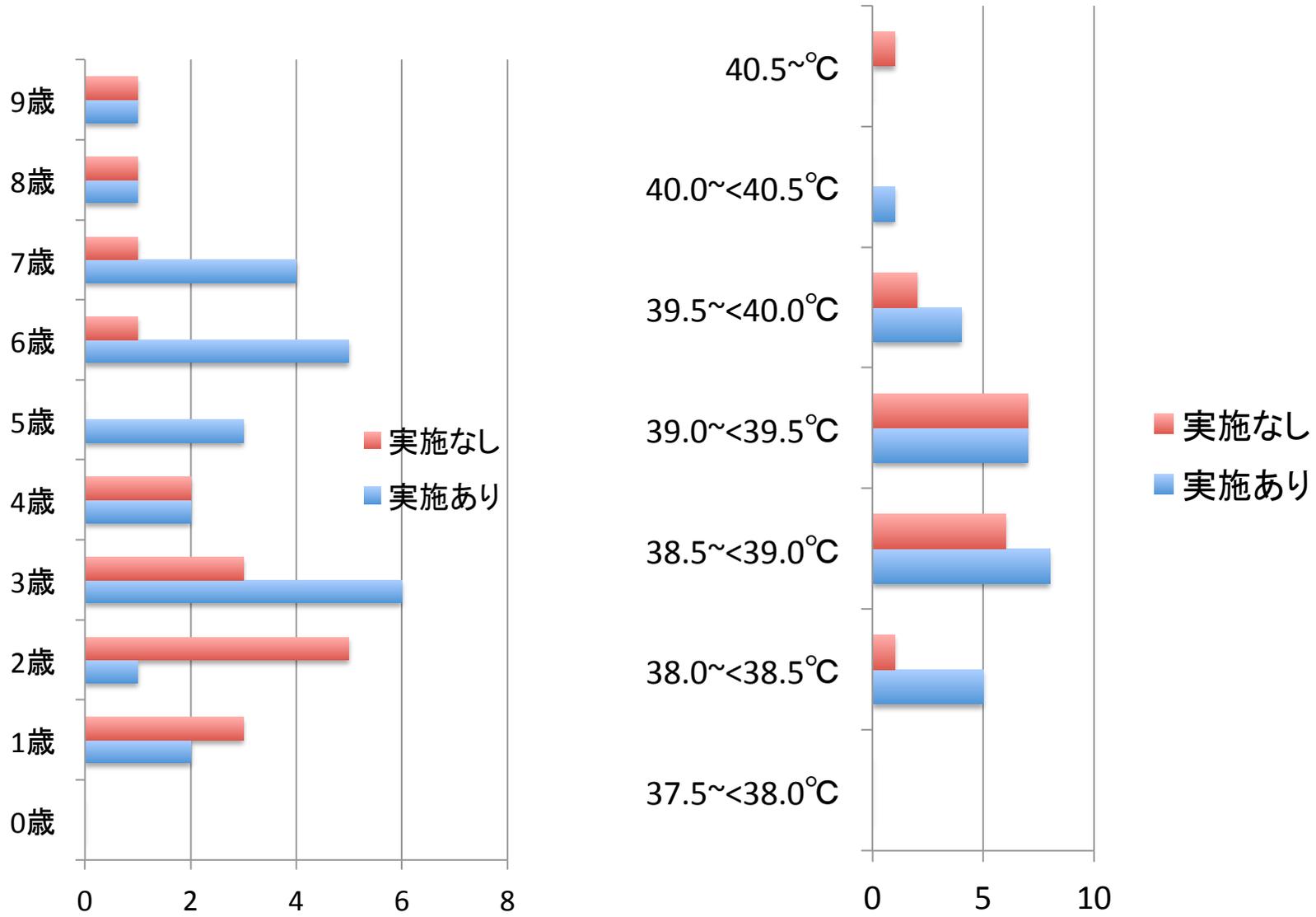
目的、対象、方法

- 目的; 発熱患者にグリセリン浣腸を施行、あるいは処方し、その有用性を検討する。
- 対象; 2013年7月9日から8月18日に発熱を主訴に受診した10歳未満の小児。
- 方法; 0～5歳未満は30ml, 5歳以上は60mlのGEを2個処方。頭痛、腹痛などの症状が強い場合は院内で施行。解熱剤は浣腸をして軽快しない場合にのみ用いるよう指導した。経過については受診後、3～5日以内に電話で確認。

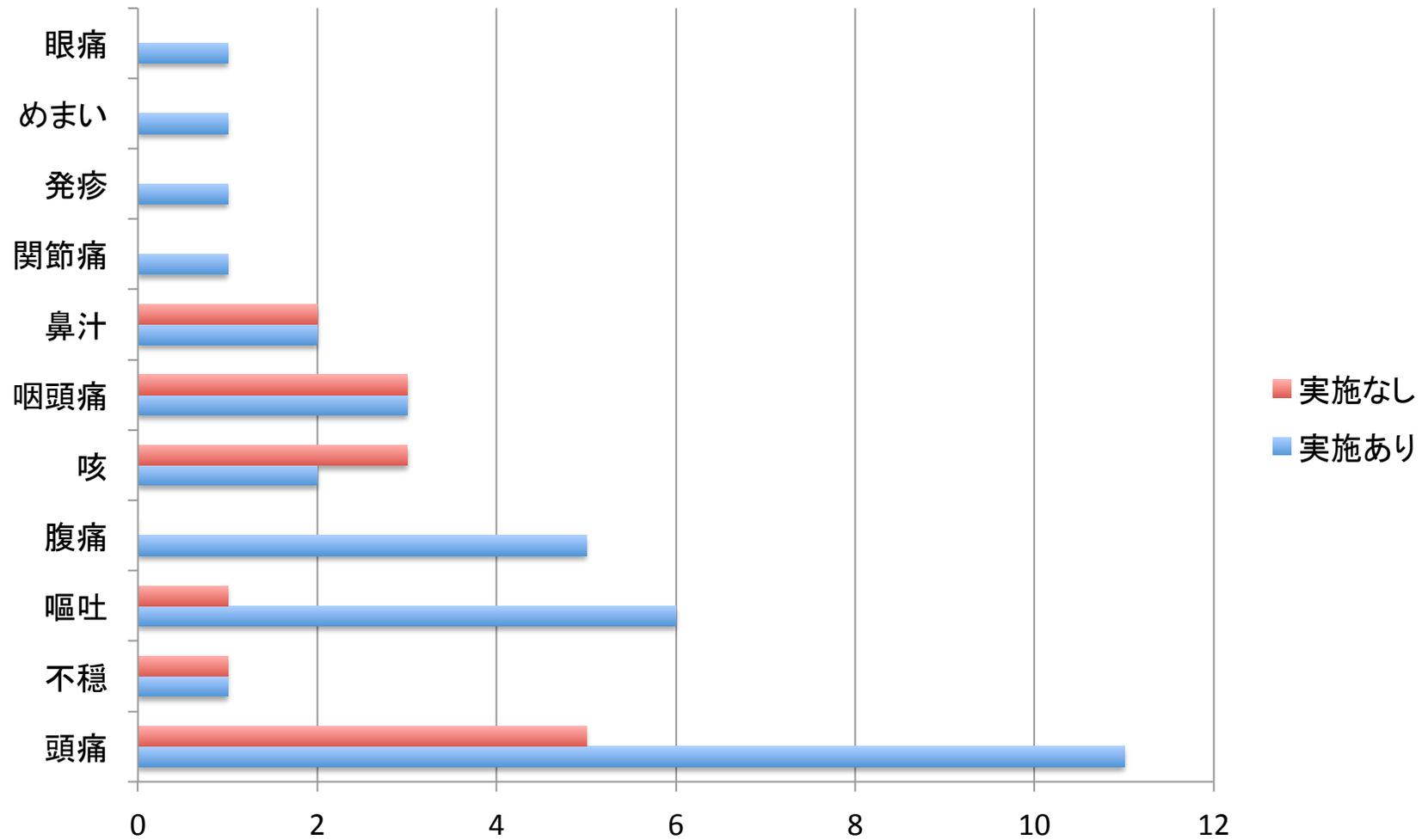
浣腸実施あり、なしの患者数、平均体温、病名など (経過不明者1人を除く)

項目		浣腸実施あり	浣腸実施なし	合計
患者数 (男:女)		25(M:F=14:11)	17(M:F=10:7)	42
年齢の平均値		4.8歳	3.5歳	
最高体温の平均値		39.0°C	39.1°C	
解熱剤処方	なし	23	15	38
	あり	2	2	4
疾患名				
	感冒	19	11	30
	咽頭結膜熱	2	2	4
	急性咽頭扁桃炎	1		1
	ヘルパンギーナ	1		1
	手足口病	1	3	4
	肺炎の疑い	1		1
	突発性発疹		1	1

対象患者の年齢、体温のヒストグラム



発熱以外の症状のヒストグラム



浣腸の実施状況と経過

浣腸実施群の経過 25人

浣腸非実施群 17人

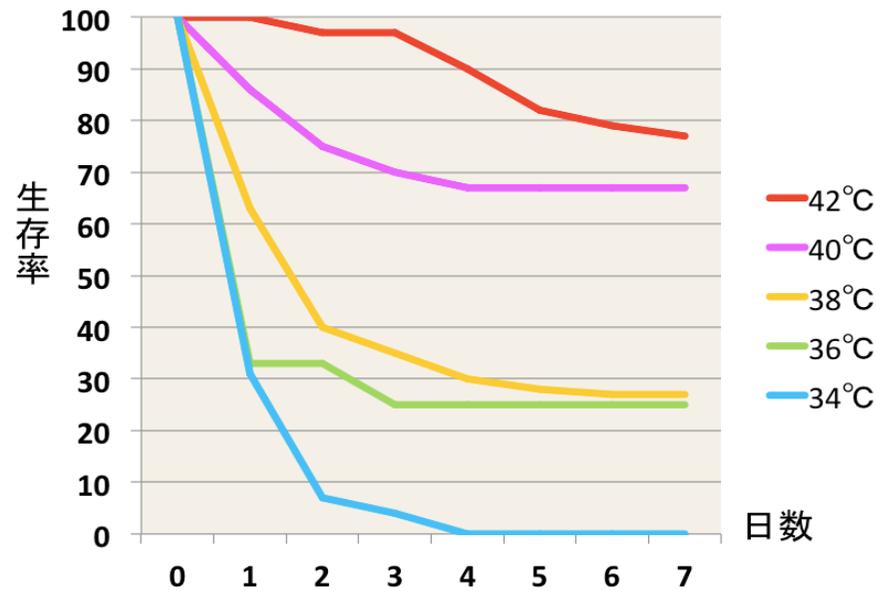
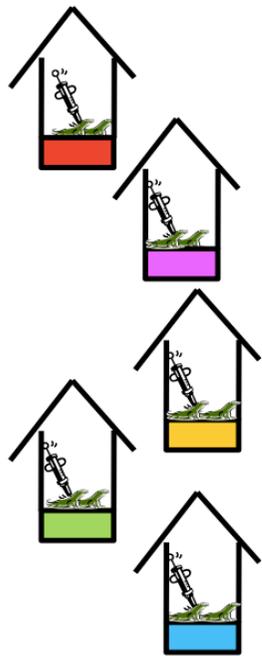
効果	人数
夜、よく眠れた	13
熱が下がった、元 気になった	5
腹痛, 頭痛が良くな った	2
変わりなかった、 悪化した	5 (20%)
解熱剤内服	0

浣腸しなかった理由	人数
元気があった、症 状が軽快した、 夜は眠れた	10
帰宅して自力で排 便した	4
とくに理由はない	3
解熱剤内服	0

考察1. 飼育温度と人為的感染症を起こしたトカゲの生存率

(よしだ小児科クリニック 吉田均氏提供)

種々の温度の箱に閉じ込めると
どうなるか？



Kluger. Science 188:166,1975

高温環境の方が生存率が高く、発熱は感染症を
治癒せしめる上で不可欠の要因である

発熱が生存率を高める作用機序

- 高温下での病原体の発育、増殖抑制
- フェリチンの合成とラクトフェリンの放出による血漿鉄の低下
- 多形核白血球の運動性は 42°C で最大、貪食機能も $38\sim 40^{\circ}\text{C}$ で最高
- インターフェロンの産生増加
- マイトジェンによるリンパ球芽球化は 37°C より 39°C の方が10～20倍高い

浣腸が奏功した実例

1. 6歳男児例

- 夜中から発熱,37.2°C 頭痛を発現。バツファリンを服用して治まっていたが、午後から高熱39°Cなり、また激しく訴えるようになった。嘔吐は1回
- 身体所見:腹部:膨満(+),圧痛(+),便塊(+),腫瘤(-)
- グリセリン60mlで反応便あり。少し軟便、普通量。
- 排便後、頭痛、腹痛などの症状は軽快。すごく楽になった。

2. 4歳男児例

- 今朝から発熱38.7°C、13時半39.6°C 14時半40.4°C。腹痛、右足ふくらはぎの疼痛も訴えた。嘔吐、排便はない。
- 身体所見:腹部:膨満(+),圧痛(+),便塊(+),腫瘤(-)
- 白血球数(WBC) 9400 / μ l、CRP;0.0 mg/dl
- グリセリン60m 普通、軟便、少量。排便後、腹痛、ふくらはぎの痛みなどの症状は軽快。浣腸後は38.5°Cになった。

考察2. 発熱に伴う頭痛、不眠、不穏にはどう対処すればよいのか？

6～7億年前の先カンブリアまでさかのぼる脳と腸の関係

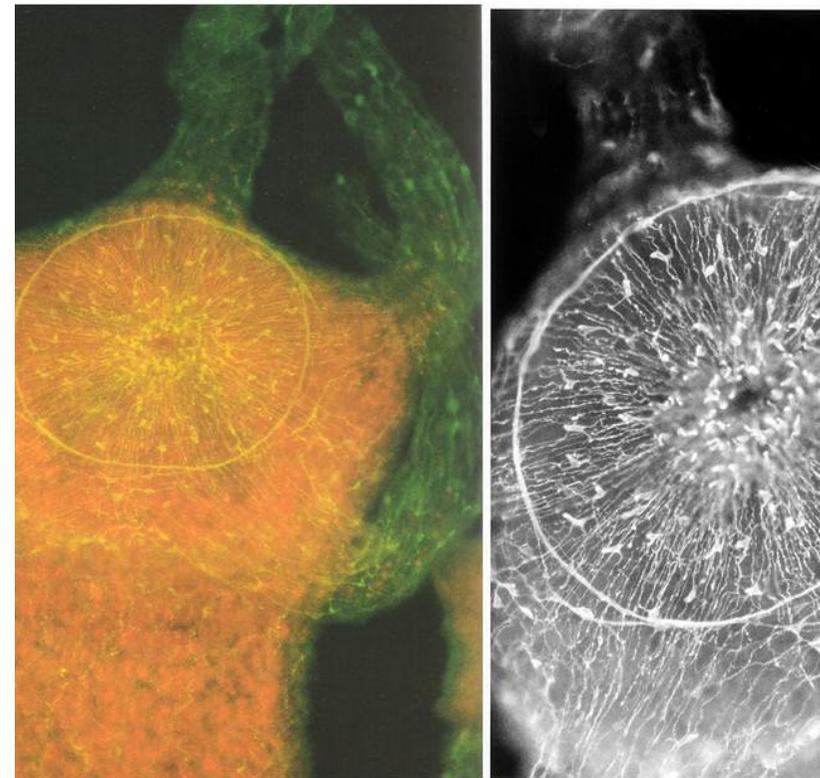
脳と腸の起源、それは刺胞動物から始まった

福岡女子大学国際文理学部教授 小泉修;さまざまな刺胞動物

<http://www.fwu.ac.jp/rinfo/cgi-bin/info.cgi?name=koizumi>

- 進化医学が解き明かす
浣腸の効果
- 消化管と神経系はもっ
とも古いパートナーシッ
プ
- 消化管はチューブ構造、
浣腸は機能改善につな
がる
- 消化管の機能改善は
脳機能改善につながる

ヒドラの口の周りを取り巻く神経環



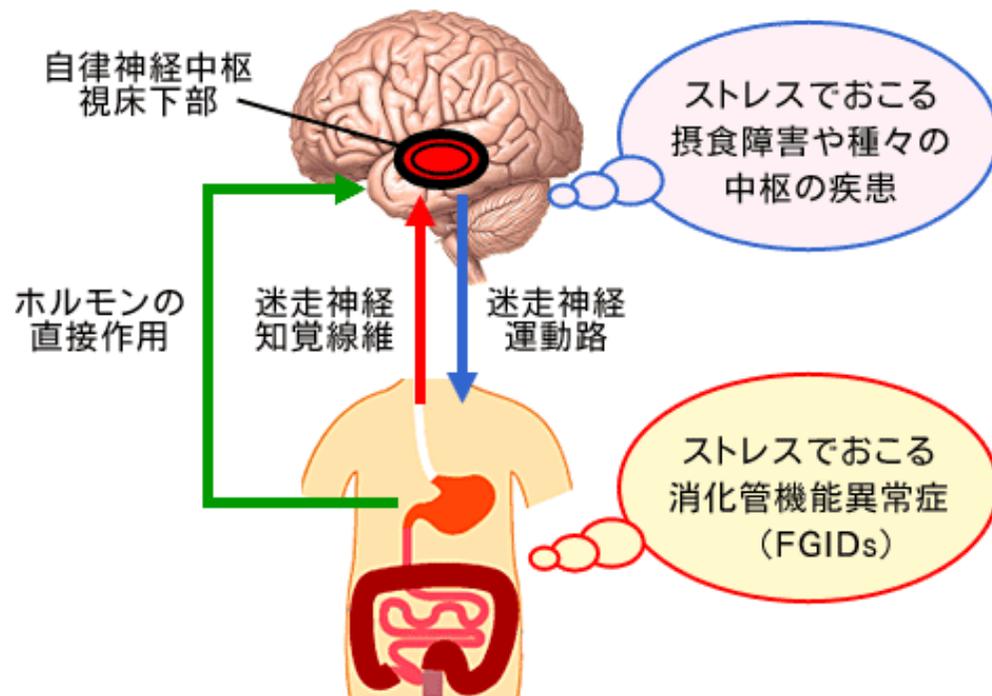
脳と腸の機能相関

ストレスでおこる消化管機能異常症の治療戦略

札幌医科大学解剖学第二講座教授 藤宮峯子

<http://web.sapmed.ac.jp/anat2/research/research03.htm>

脳が消化管機能を支配し、
消化管も脳機能を支配する！



- 消化管運動の異常は、脳から消化管への遠心性経路のみならず、消化管から脳への求心性経路が病態の形成に関係。脳腸相関の観点に立ったダイナミックな研究が必要。
- 脳が消化機能を支配し、消化管も脳機能を支配する

まとめ

- 発熱患者に対して、グリセリン浣腸は頭痛、不眠、不穏、腹痛などの随伴症状を軽快させる有力な手段となり得る